『哲学探究』における言語の「正常な場合」をあぶり出す

溝越　大秦（Mizokoshi Taishin）

所属 大阪大学

本発表は、PI において想定される、言語の「正常な場合」がどのようにして決定づけられるのかを検討することが目標である。ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、『哲学探究』(以下 PI)にて、自身が取り組む活動によって「哲学的な諸問題が完全に消滅しなくてはならない」(PI §133)という。彼が目指すところは「自分たちの言葉の適用に関する規則の体系を、聞いたこともないようなやりかたで洗練したり、完全にしたり」（PI §133）することではない。そのために彼は「日常的な言語形式が容易に見過ごしてしまう諸々の区別を、常に繰り返し強調するだろう」（PI §132）と自らの考察手法を述べる。つまり彼は、言葉の新しい使用を提案するのではなく、我々が言語をスムーズに運用している時の観察とそれらの実証を繰り返す。

日常的な言語使用とは、具体的にどのようなものか。それは「哲学的な諸問題が完全に消滅」(PI §133)し、「その単純さと平凡さによって隠されている」(PI §129)ものを明らかにした際にわかるであろう。そのためには「完全な明晰さ」(PI §133)が必要であるという。「完全な明晰さ」(PI §133)の元では「言葉の使用が明確に指定されてい(PI§142)」て「あの場合、この場合にどう言うべきかを知っており、疑いを持たない」(Ibid.)。そして、言葉の使用が明確に指定されるのは「正常な(normal)場合にだけ」(Ibid.)である。つまり日常的とは、カメラ等でありのままを切り取ったようすではなく、明確に言葉の意味が指定される「正常な場合」なのである。

この「正常な場合」とはどのような場合か。「正常な場合」がどのようなケースであるかについての議論としてここで Savigny(2006)）を取り上げる。Savigny(2006)はウィトゲンシュタインの個別的事例重視の姿勢に沿って、さまざまな社会的場面を想定し、言葉の意味がどのようにして決定付けられるかを論じている。彼は言葉の意味が社会において期待される(expected)ように決定づけられており、その期待は言葉に対する相手の反応(react)としての振る舞い(behavior)からなると言う。

Savigny(2006)によれば、語の意味にはそれに応じた豊富な振る舞いの諸規則や、単語の使用を特徴づけるものがあるという(Savigny(2006),p.231)。彼はウィトゲンシュタインによる「なぜ私の右手が左手に金を贈ることができないのか」(PI §269)という問いに対して、「実践的結果」(practical consequence)を伴わなければならないからだと答える。受け取り手は贈与物の持ち主となり、義務の有無に関わらず返礼をする場合もある。そして、受け取り手は贈与物に対する独占権を持ち、他人はそれに対して寛容にならねばならない。(Savigny(2006),p.232)そのような「複数人が関わる、規則に従う振る舞い(rule-following bahavior involving multiple people)」(Savigny(2006),p.232)が一般的に期待される(generally expected)ところにおいて、語が言葉の要素として成り立ち、意味を持つと Savigny(2006)は述べる。

さらにその振る舞いを決定づけるのはその語を発した人間の周囲が「—として取り扱うこと(treating as)(Savigny(2006),p.241)」である。怪我をして泣いている子どもを泣き止ませようとして取り扱うことは、その泣いている子どもの「痛い！」という発話や泣いている仕草が悲痛を訴えていることを理解していることと同義であるという。(Savigny(2006),p.241)そして、そのような取り扱いが期待されることにより、言葉やそれに関わる行為の意味するところ、すなわち「正常な場合」が決定される。

Savigny(2006)は PI の公共性に基づいた議論に丁寧に沿っており、PI に散見される諸々の個別具体的な例に対して「振る舞い」や「期待」の概念を使い、一般化を試みているように読める。具体例に基づいた議論によって、発話や行動などの「取り扱い」、それに対する「期待」などといった心的な概念も用いて、単なる行動主義に陥ることを回避していると思われる。

しかし、「われわれが『知る』という語を、それが正常な仕方で使われているように（中略）使うとき、他人はきわめて頻繁に、いつわたくしが痛みを感じているかを知ってしまう。—その通り。でも、わたくしが自分で知るのと同じ確実さでもって知っているわけではない!」（PI §246）というように、ウィトゲンシュタインからすれば同じ「痛みを感じていることを知る」という文章でも主語の人称が変われば伝わり方に相違が生じる。また「わたくしが自分の痛みを感じていることを知っている、などということができない（冗談など言う場合以外には）。（中略）わたくしはそれを感じているのである」（ibid.）とあるように、Hacker(2006)はそこから、他者が痛みを抱えていると知ることは、その行為の理解や予測に役に立つが、我々はその他者自身が痛みを抱えていることを知っているか否かを尋ねることはないと指摘する(Hacker(2006))。「正常な場合」は「取り扱い」や「期待」などの間にない場合もある。本発表は PI において想定される、言語の「正常な場合」がどのようにして決定づけられるのかを Savigny(2006)や Hacker(2006)をはじめとした論者をもとに輪郭を浮かび上がらせていく。

参考文献

・Ludwig Wittgenstein, Philosophical Investigations, translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, revised fourth edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell , 2010,略号 PI

（L. ウィトゲンシュタイン, 藤本隆志訳,『哲学探究』,『ウィトゲンシュタイン全集 8 』, 大修館書店, 1976）

・Eike von Savigny, ’Taking avowals seriously: the soul a public affair’, “Wittgenstein: The Philosopher and his Works”, p.230-243Edited by Alois Pichler and Simo Säätelä, Volume 2 in the series Publications of the Austrian Ludwig Wittgenstein Society – New Series

・P.M.S. Hacker, ‘Of knowledge and of knowing that someone is pain’, “Wittgenstein: The Philosopher and his Works”, p.230-243Edited by Alois Pichler and Simo Säätelä, Volume 2 in the series Publications of the Austrian Ludwig Wittgenstein Society – New Series